陸連時報

2016 平成28年 **11** 月号

題字は平沼亮三（初代陸連会長）の書

目　　次

強化関連情報…… 182

第31回オリンピック競技大会（2016/リオデジャネイロ）総評及び反省（日本選手団監督　麻場一徳）

第31回オリンピック競技大会（2016/リオデジャネイロ）各ブロック報告

第24回日・韓・中ジュニア交流競技会報告（日本代表選手団団長　三國一成）…… 189

デカネーション2016（マルセイユ/フランス）大会報告（強化委員会女子短距離部長　瀧谷賢司）…… 190

第205回、第206回 国際陸上競技連盟（IAAF）カウンシル会議報告（会長　横川浩）…… 191

インターハイにおける科学委員会研究活動報告（科学委員会委員　貴嶋孝太）…… 192

大会観戦ガイド…… 194

陸協NEWS…… 196

事務局からのお知らせ…… 198

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものでありますが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わさせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

第31回オリンピック競技大会（2016/リオデジャネイロ）総評及び反省

日本選手団監督　麻場一徳

リオデジャネイロ・オリンピックにおける陸上競技の達成目標は、メダル１個、入賞５個であった。目標設定にあたっては、直前の世界ランキングを参考とし、世界ランク５傑以内に入っている男子20km競歩、男子50km競歩、男子４×100ｍリレー、女子マラソンの４種目をメダル候補とし、これらの種目に世界ランキング12傑以内にある女子10000mを加えて入賞候補とした。なお、男子20km競歩、男子50km競歩および女子マラソンは複数入賞も期待きたいできるとも考えていた。これらの種目以外にも、強化競技者（ゴールド、シルバー）に指定されている競技者にも、メダルや入賞の期待をしていたが、具体的に目標としてあげることは避けた。

なお、今大会における日本選手団は最終的に52名（男子38名､女子14名）であった。選手の選考にあたっては、強化委員会にて深く議論され、選手に明確な目標をもってもらうために、選考される記録、代表選手選考会における順位、それらの優先順位などを明確に示すように努めた。このようなわかりやすい選考要項を示したことが、選手間の適切な競争を生み、競技力を高める一因となったことは間違いない。

結果としては、メダル２個（銀メダル１個、銅メダル１個）、入賞２個（７位２個）を獲得するに至った。メダル獲得に関しては、男子４×100ｍリレー銀メダルという歴史的快挙を含む２個のメダルを獲得できたことは、現在の日本の陸上競技のレベルから考えれば上出来だったと思われる。50km競歩の荒井選手の銅メダル獲得にも一悶着あったため、結果として、陸上競技選手団の活躍を日本中の皆さんに広く知っていただけることになり、そのことについては非常に良かった。

しかしながら、入賞５個という目標値からすると、２個という結果は物足りないものである。棒高跳の澤野選手のように、しぶとく次のラウンドへ進出し、入賞を勝ち取るような戦い方をもっと多くの者がやっていかなければ、日本の陸上競技界のレベルは上がっていかないという危機感を持っている。2020東京・オリンピックに向けては、その辺りの力をつけていくことが、大きな課題としてあげられる。

現強化委員会の施策の一つとして、個人強化を重点課題に、強化競技者制度の充実を図ってきた。その内容は、記録達成レベルに応じてゴールドアスリートとシルバーアスリートの２段階にランクし、ゴールドアスリートには年間1000万円の、シルバーアスリートには年間500万円の強化費を支給するものである。リオデジャネイロ・オリンピックを直前にして、ゴールド４名、シルバー21名、計25名の競技者がその対象となっており、そのうち、20名がリオデジャネイロ・オリンピックに出場した。今回の個人種目の８位入賞者は、いずれも強化競技者にランクされており、その意味では本施策が実ったものと評価できる。しかしながら、「25名中４名の８位入賞者」というのはあまりにも低確率だという見方もでき、その評価の方が妥当かもしれない。

また、文部科学省によるハイパフォーマンスサポート事業の対象として、男子競歩と女子マラソンがターゲットＢに、男子４×100ｍリレーと男子マラソンがターゲットＣに指定され､支援を受けてきた。そのことからしても、男女マラソンで一人の入賞者も輩出できなかったことは、大いなる反省事項であり、東京・オリンピックに向けての大きな課題となった。

現地での調整

リオデジャネイロ・オリンピックでは、時差及び生活環境において厳しい条件が予測されたことから、日本代表陸上競技選手団として事前時差調整合宿をブラジル連邦共和国以外の地で実施しようと２年ほど前からその準備にとりかかった。何度も下見を重ね、最終的にアメリカ合衆国ニュージャージー州に位置するプリンストン大学が選択され、概ね１週間のスケジュールで事前合宿を行った後リオ入りすることとした。この事前合宿は、代表選手､スタッフ以外に各選手の専任コーチ､トレーナー、日本陸連医事委員会及び科学委員会スタッフが集結し、さらには栄養士及び調理師も帯同して、練習環境はもちろん、生活環境においても万全の準備を施した上での現地入りが実現した。

直前になっての故障者が数名出たが、上記サポートスタッフの献身的な努力により欠場者が出ることなく本番を迎えられたのは、大きな収穫だったと思われる。2020年東京・オリンピックは日本国内での大会ではあるが、今回のような事前合宿から大会への流れは、本番を迎えるまでのコンディショニングの進め方として大いに参考とすべきである。

現地での生活環境は、予想通り厳しいものであった。治安の問題から、基本的に選手村と競技場を行き来するのみの毎日が要求された。加えて、居住スペースや食環境も満足できるものではなかった。その意味からして、JSCが準備してくれたハイパフォーマンスセンターやJOCのＧロードステーションの存在は大きかった。選手たちは、これらを上手く活用することによって大会に対するストレスの解消を実現できたと感じている。

今回、選手村と競技場との距離が遠く、バスで40分ほどのところにあった。オリンピックレーンが設置され、渋滞のストレスは少なかったが、その代わりにバスのスピードが速く、運転も荒かったため、これも毎日の大きなストレスとなった。マラソン、競歩においてはそのような問題を解消すべく、選手村とは別に拠点を設け、コンディショニングに活用したが、今度は治安の心配から練習場所の確保に苦労する事態となった。

いずれにしても、関係スタッフの工夫、努力によって乗り越え、大きな問題が生じることなく大会を終えることができた。

第31回オリンピック競技大会(2016/リオデジャネイロ)　各ブロック報告

〈男子短距離〉　（男子短距離部長　苅部俊二）

男子100ｍ

男子100ｍは、山縣亮太選手、桐生祥秀選手、ケンブリッジ飛鳥選手の３名が出場し、山縣選手とケンブリッジ選手が予選においてそれぞれ10秒20、10秒13で２着に入り、着順での準決勝進出を果たした。９秒台の選手を抑えての準決勝進出は高く評価できる。桐生選手は10秒23で組４着となり惜しくも予選で敗退した。しかしながら内容は悪くなく、惜しい敗退であった。準決勝は山縣選手が10秒05の自己ベストをマークしたが組５着で準決勝敗退となった。またケンブリッジ選手も10秒17で組７着となり惜しくも準決勝敗退となった。決勝進出には10秒01が必要で、手の届きそうなところまではきており手ごたえは感じさせるレースであった。

男子200ｍ

男子200ｍは飯塚翔太選手、高瀬慧選手、藤光謙司選手が出場した。３名とも決勝進出の力があったが、飯塚選手が20秒49、高瀬選手が20秒71、藤光選手が20秒86とベスト記録からしても不本意な記録で予選敗退となった。飯塚選手は惜しいレースではあったが、前半乗り切れず組４着に沈んだ。準決勝には楽に進出できる力があっただけに悔やまれる結果であった。高瀬選手は早いレース展開についていけず、藤光選手はケガから復帰後間もないこともあり、２人とも実力を発揮できなかった。しかし、200ｍは世界との距離が縮まってきており、この経験を次に生かしてほしい。

男子400ｍ

男子400ｍにはウォルシュジュリアン選手と金丸祐三選手が出場した。ウォルシュ選手は前半のスピードが持ち味であったが、前半から世界のペースについていくことができず46秒37組６着で終わり予選敗退した。金丸選手もケガが完治せず48秒38で予選敗退であった。予選通過記録は45秒54で２名とも狙えない記録ではなかったが世界の強豪を相手にまったく歯が立たなかった。男子400ｍは決勝で南アフリカのバンニーキルク選手が43秒03の世界記録をマークした。世界は42秒を狙おうかというところまで来ている。日本の400ｍは世界に大きく水をあけられており、強化策の再考が必要である。

男子４×100ｍリレー

男子４×100ｍリレーは、予選において１走山縣選手、２走飯塚選手、３走桐生選手、４走ケンブリッジ選手で臨み、37秒68のアジア新記録で組１着となり決勝進出を果たした。ボルト選手を欠くものの100ｍ９秒台の選手をそろえたジャマイカに先着する会心のレースであった。全体でも37秒62をマークしたアメリカに次ぐ記録で、メダル獲得を予感させるものであった。決勝では予選と同じメンバーで臨み、ボルト選手率いるジャマイカに次いで２位となり予選の記録を更新する37秒60をマークし銀メダルを獲得、陸上競技男子トラック種目史上最高の結果を残した。この記録はアジア記録更新とともに世界国別歴代３位の記録である。世界記録を持つジャマイカとの先頭争い、そしてゴール後失格にはなったがアメリカに先着したことは高く評価でき、歴史的快挙であった。

男子４×400ｍリレー

男子４×400ｍリレーは、１走ウォルシュ選手、２走田村朋也選手、３走北川貴理選手、４走加藤修也選手のメンバーで臨んだ。結果は３分02秒95で組７着、予選敗退した。決勝進出には３分00秒43が必要で日本記録より高い記録が必要であった。男子400ｍが惨敗したように日本の400ｍ陣の強化体制を改める必要があると強く感じさせるレースとなった。しかし、各個人の能力を考えると決して決勝進出は不可能ではない。参加16チーム中、16番目のオリンピック参加であったこと、ロシア問題で参加できるかどうかわからない不安から解放され、参加することで満足していたのかもしれない。いずれにせよ400ｍの再建は急務である。

〈女子短距離〉　（女子短距離部長　瀧谷賢司）

福島千里選手（北海道ハイテクAC）が参加標準記録突破、日本選手権優勝の内定基準を満たし女子短距離唯一の出場となった。大会を迎えるにあたり100m、200mともに１本でも多く走ること、つまり、まずは準決勝進出が現実的な目標であった。結果は100m棄権、200m予選敗退であった。アメリカ・ニュージャージでの事前合宿中に負傷し、100mを棄権せざるを得ない状況になってしまったことは悔やまれるが、冬から春にかけて練習も充実し、３月下旬の女子短距離合宿では非常に良い走りをして順調だったのにもかかわらず、シーズンに入って足の痙攣があり、シーズンに移行するところで心も体作りも含めて色々なところで微妙なずれがあったのかなと感じる。非常に残念な結果だが、女子短距離を４年間以上引っ張ってきた存在であり、来年も含め次の福島選手に次げる選手が出てくるまでは続けてほしいと思う。福島選手に関しては事務局の協力もあり、この１年半は海外遠征も含め強化できた。福島選手にとってはプラスになり、総合的な力というところではアップしたと考えられる。一方で、福島選手以外の選手については能力があっても次のステージが見えてこないという現状が２、３年続いている。今回の日本選手権においてもリレーを想定して強化し続けてきた選手が決勝進出も果たせず、両リレーの出場権未獲得となってしまったことは課題が残った。女子短距離の今の世界からの位置をもう一度きちっと整理して2020年に向っていかなければならない。

〈男子中距離〉　（中距離部長　平田和光）

ロンドン・オリンピックに続いての派遣となった男子800mでは、川元奨選手が予選５組（７組３着及び４位以下上位記録３名）で出場した。持ちタイムを考慮すると、予選を通過し準決勝に進出するためには、自己記録の更新が必要だと考えていた。一周目の400m

を56秒41とスローペース通過してしまったことで、自己記録の更新は困難であったが、ラスト勝負となるゴール直前まで３着争いをしたことは健闘したといえる。タイムは１分49秒41にとどまり、３位に0.01秒差の４着となり惜しくも準決勝進出はならなかったが、着順で次ラウンドに進出するという勝負強さを感じるレースであった。日本人選手の中では比較的筋肉質な体系で当たり負けしない川元だが、外国人選手と比較するとどうしても体格で負けてしまい、どこか力んだ走りで体力を使っていたように思う。今後は、このような勝負に競り勝つことができるような世界で戦える選手になってほしい。

〈男子長距離・マラソン〉

（男子長距離・マラソン部長　宗猛）

10000ｍ決勝、大迫傑選手は優勝したモハメド･ファラー選手（英国）や５位入賞したゲーレン・ラップ選手（米国）と同じチームに所属し、同じコーチに指導を受けながら調整をしてきた。日本選手権の時よりはやや動きが重かったように感じたが、入りの1000mを２分55秒、通過の5000mを13分54秒と比較的スローな展開で上手く流れに乗っていた。しかし、後半の5000mを13分10秒と驚異的なペースアップに大迫選手は対応できず8000mで離れてしまい、17位となった。順位は落としながらも、26分台の記録を持つ選手たち

第31回オリンピック競技大会（2016／リオデジャネイロ）日本代表選手リザルト
【男子】

No.	競技種目	氏名	所属	自己ベスト	
1	100m	ケンブリッジ　飛鳥	ドーム	10.10	
2	100m	山縣　亮太	SEIKO	10.06	
3	100m	桐生　祥秀	東洋大学	10.01	
4	200m	飯塚　翔太	ミズノ	20.11	
5	200m	髙瀬　　慧	富士通	20.14	
6	200m	藤光　謙司	ゼンリン	20.13	
7	400m	ウォルシュ ジュリアン	東洋大学	45.35	
8	400m	金丸　祐三	大塚製薬	45.16	
9	800m	川元　　奨	スズキ浜松AC	1:45.75	
10	5000m	大迫　　傑	Nike ORPJT	13:08.40	
	10000m			27:38.31	
11	5000m	村山　紘太	旭化成	13:19.62	
	10000m			27:29.69	
12	10000m	設楽　悠太	Honda	27:42.71	
13	3000mSC	塩尻　和也	順天堂大学	8:31.89	
14	110mH	矢澤　　航	デサント	13.47	
15	400mH	野澤　啓佑	ミズノ	48.67	
16	400mH	松下　祐樹	ミズノ	49.10	
17	三段跳	長谷川大悟	日立ICT	16m88	
18	三段跳	山下　航平	筑波大学	16m85	
19	走高跳	衛藤　　昂	AGF	2m29	
20	棒高跳	澤野　大地	富士通	5m83	
21	棒高跳	荻田　大樹	ミズノ	5m70	
22	棒高跳	山本　聖途	トヨタ自動車	5m77	
23	やり投	新井　涼平	スズキ浜松AC	86m83	
24	20kmW	松永　大介	東洋大学	1:18:53	
25	20kmW	藤澤　　勇	ALSOK	1:18:45	
26	20kmW	髙橋　英輝	富士通	1:18:03	
27	50kmW	荒井　広宙	自衛隊体育学校	3:40:20	
28	50kmW	谷井　孝行	自衛隊体育学校	3:40:19	
29	50kmW	森岡紘一朗	富士通	3:43:14	
30	マラソン	佐々木　悟	旭化成	2:08:56	
31	マラソン	石川　末廣	Honda	2:09:10	
32	マラソン	北島　寿典	安川電機	2:09:16	
33	十種競技	右代　啓祐	スズキ浜松AC	8308点	
34	十種競技	中村　明彦	スズキ浜松AC	8180点	
-	4x100mR	山縣　亮太 - 飯塚　翔太 - 桐生　祥秀 - ケンブリッジ　飛鳥			
-	4x400mR	ウォルシュ ジュリアン - 田村　朋也 - 北川　貴理 - 加藤　修也			

※110mハードル予選(全5組)において悪天候による中断より前に実施された第1組と第2組の選手の不利益を鑑み、順位により予選通過が

とのレースにおいては、現状の力は出せたのではないかと思う。

村山紘太選手と設楽悠太選手は国内にて練習を行い、８月４日にプリンストン大学に入り時差調整をしてきた。その後８月８日にリオの選手村に移動し、公式練習会場とサブトラックを使って調整を進めてきた。二人とも良い状態であると専任コーチから聞いていたため、北京・世界選手権の経験をどう活かすかと期待していたが、4000m手前で集団から離れ、徐々に動きが硬くなり、設楽は29位、村山は30位と記録的にもシーズンベストにも遠く及ばず、北京・世界選手権での経験を活かすことができなかった。

5000m（２組５着及び６着以下上位記録５名）の予選１組に出場した村山選手は2000m（５分31秒）まで先頭を走ったが、集団に吸収されるとズルズル後退し、22位でフィニッシュ。ここ数年のワースト記録でのゴールとなった。予選2組で走った大迫選手は決勝進出も期待できたが、先頭集団のラストスパートに対応できずに16位と落選した。しかしながらシーズンベストの記録となる走りは、評価したい。

3000mSC（３組３着及び４着以下上位記録６名）の１組で出場した塩尻和也選手は、国際陸上競技連盟のインビテーションで急遽代表入りしたためか調整期間も短く、前半こそ動きは良かったが後半は本来の伸びやかな走りはできず、11位と予選敗退という結果で

該当ラウンドはありません

日付	予選	日付	準決勝	日付	決勝
8/13	10.13 (2/h4)　-0.5m/s　準決勝進出	8/14	10.17 (7/3h) ±0.0m/s　落選	8/14	
8/13	10.20 (2/h8)　-1.3m/s.　準決勝進出	8/14	10.05 (5/2h) +0.2m/s　PB 落選	8/14	
8/13	10.23 (4/h7)　-0.4m/s　落選	8/14		8/14	
8/16	20.49 (4/h3) +0.3m/s 落選	8/17		8/18	
8/16	20.71 (6/h9) +0.6m/s 落選	8/17		8/18	
8/16	20.86 (6/h5) -1.5m/s 落選	8/17		8/18	
8/12	46.37　(6/h4)　落選	8/13		8/14	
8/12	48.38(8/h7)　落選	8/13		8/14	
8/12	1:49.41 (4/h5)　落選	8/13		8/15	
8/17	13:31.45 (16/h2) 落選			8/20	
				8/13	27:51.94　17位
8/17	14:26.72 (22/h1) 落選			8/20	
				8/13	29:02.51　30位
				8/13	28:55.23　29位
8/15	8:40.98 (11/h1) 落選			8/17	
8/15	13.88 (3/h6)-0.1m/s 落選 審判員判断による再レース※	8/16		8/16	
8/15	48.62 (1/h4)　PB 準決勝進出	8/16	49.20 (6/h1) 落選	8/18	
8/15	49.60 (4/h1) 落選	8/16		8/18	
8/15	16m17 (15/A) +0.3m/s 落選			8/16	
8/15	15m71 (18/B) +0.3m/s 落選			8/16	
8/14	2.17(18/A)　落選			8/16	
8/13	5m60　(7/A)　決勝進出			8/15	5m50 7位入賞
8/13	5m45　(11/A)　落選			8/15	
8/13	記録なし　(B)　落選			8/15	
8/17	84m16 (3/B) 決勝進出			8/20	79m47　11位
				8/12	1:20:22　7位入賞
				8/12	1:22:03　21位
				8/12	1:24:59　42位
				8/19	3:41:24　銅メダル
				8/19	3:51:00　14位
				8/19	3:58:59　27位
				8/21	2:13.57 16位
				8/21	2:17.08 36位
				8/21	2:25.11 94位
8/17	100m　11.30 (7/h1) +0.5m/s　795pt	8/18	110mH　15.09(4/h1) +0.4m/s 839pt		
8/17	LJ　6m83 (13/B) +0.3m/s　774pt	8/18	DT　49m90 (2/A)　868pt		
8/17	SP　14m14 (7/B)　737pt	8/18	PV　4m90 (3/B)　880pt		7952pt　20位
8/17	HJ　1m98 (9/B)　785pt	8/18	JT　66m63 (2/B)　838pt		
8/17	400m　50.43 (4/h1)　795pt	8/18	1500m　4:46.33 (10/h1)　641pt		
8/17	100m　11.04 (7/h3) -0.8m/s　852pt	8/18	110mH　14.57(6/h4) +0.7m/s　902pt		
8/17	LJ　7m13 (14/A) +0.4m/s　845pt	8/18	DT　34m91 (13/B)　562pt		
8/17	SP　12m00 (15/A)　606pt	8/18	PV　4m70 (4/B)　819pt		7612pt　22位
8/17	HJ　1m92 (12/B)　731pt	8/18	JT　51m24 (11/A)　607pt		
8/17	400m　48.93 (6/h4)　865pt	8/18	1500m　4:18.37 (1/h1)　823pt		
8/18	37.68 (1/h2) アジア記録、日本記録			8/19	37.60　アジア記録、 日本記録　銀メダル
8/19	3:02.95 (7/h1) 落選			8/20	

決定した上位4名を除く、5着から8着までに、再レースの機会が与えられた。

あった。年齢的にも、これからの成長を期待したい。

マラソンについては、日本人トップとなる16位でゴールした佐々木悟選手が25kmまで余裕をもって走っていたが、次の５kmで１分以上の急激なペースアップに対応できなかった。また、レース後半には薄日が差し始め、高温多湿を苦手とする佐々木選手はそれまでのペースを維持するのがやっとの状況だったが、現状の力は出せたのではないかと思う。石川末廣選手は、リオに入ってからも順調で一番期待できる仕上がりに感じた。スタート時から終始集団左手側に寄りながら自分の走りを続けていたが、25km手前で遅れはじめ、その後、体に力が入らず（原因は不明。脱水かと思われる）後退してしまった。左アキレス腱に痛みを抱える北島寿典選手は、先頭集団のスローペースにも関わらずスタート直後から集団の後方で徐々に遅れだし、何とかゴールをする状態だった。レースは、前夜から雨が残り比較的涼しい中でのスタートとなったが、レース後半には薄日が差し始め、高温多湿の中での厳しいレースとなった。2020年にオリンピックが開催される東京の夏はもっと暑い。この４年間で蓄積した暑熱対策のデータを４年後に活かして、選手強化に繋げていきたい。

〈女子長距離・マラソン〉

（女子長距離・マラソン部長　武富豊）

女子10000mでは、スタートから1000m通過までは３分05秒と想定した出だしだったが、そこから４位に入賞したナワウーナ選手（ケニア）が先頭に立つと一気にペースアップし5000mの通過が日本記録を上回る15分41秒で通過、さらに優勝したアヤナ選手（エチオピア）が加速し、世界記録を樹立するレースとなった。

日本選手で期待していた鈴木亜由子選手が大会直前に故障し、5000mに絞る為欠場したこともあり、高島由香選手（18位）・関根花観選手（20位）は結果的には全く歯が立たない結果となってしまった。しかし、高速レースになった中、スタート直後から前方を走る姿勢を見せ、共にセカンドベストで走れた事は評価したい。

3000ｍSC予選に出場した高見澤安珠選手は持ち前の積極的なレースを行い、2000m手前まで先頭で走ったが、そこから大幅にペースダウンしてしまい、自己記録からは大幅に悪い結果で終わった。先頭で走った事は評価できるが、明らかに実力差がある選手との戦いだった事を考えれば、自己ベストを狙い決勝進出を狙う為の戦略があっても良かった。

女子5000mでは、予選通過を目標に積極的なレースを行う戦略で臨んだ。予選１組では、上原美幸選手がスタートから飛び出し、後続の選手が追って来ず、途中15秒差をつけて独走となった事の幸運に恵まれ、この種目で20年ぶりの決勝進出を果たした。予選２組目には鈴木選手・尾西美咲選手の２名が出場。故障で10000mを欠場した鈴木選手が先頭を引っ張る予想外の展開になり、想定よりスローなスタートになってしまった。予選通過を期待した尾西選手も自分の走りが出来ず、２名とも落選する結果に終わった。決勝では上原選手が自己記録更新を目標に、スタートから飛び出したが、すぐに10000mで世界記録を樹立したばかりのアヤナ選手（エチオピア）を中心とする集団に捕まり、中盤からのペースアップに対応出来ずに終わってしまった。入賞ラインと予想されたオーストラリアをマークして走る戦略でも良かったと思う。

女子マラソンでは、優勝タイムが２時間23分台と予測していただけに、福士選手が５月後半に故障して十分な準備が出来なかった事や、順調に準備出来ていた伊藤選手が大会直前に故障し、万全の状態でスタートに立てなかった事や、田中選手については問題なく大会を迎え期待していたが、20kmまでも先頭に着いて行けなかった予想外の結果は非常に残念だった。

今回の結果では、アメリカやオーストラリアが入賞を果たしただけに、日本勢でも戦える可能性があったと考えると、オリンピック

第31回オリンピック競技大会（2016／リオデジャネイロ）日本代表選手リザルト
【女子】

No.	競技種目	氏名	所属	自己ベスト	
1	100m	福島　千里	北海道ハイテクAC	11.21	
	200m			22.88	
2	5000m	上原　美幸	第一生命グループ	15:21.40	
3	5000m	尾西　美咲	積水化学	15:16.82	
4	5000m	鈴木亜由子	日本郵政グループ	15:08.29	
	10000m			31:18.16	
5	10000m	高島　由香	資生堂	31:35.76	
6	10000m	関根　花観	日本郵政グループ	31:22.92	
7	3000mSC	高見澤安珠	松山大学	9:44.22	
8	400mH	久保倉里美	新潟アルビレックスRC	55.34	
9	走幅跳	甲斐　好美	VOLVER	6m84	
10	やり投	海老原有希	スズキ浜松AC	63m80	
11	20kmW	岡田久美子	ビックカメラ	1:29:40	
12	マラソン	福士加代子	ワコール	2:22:17	
13	マラソン	田中　智美	第一生命グループ	2:23:19	
14	マラソン	伊藤　　舞	大塚製薬	2:24:42	

のような大きな大会で結果を残せなかった日本勢のメンタル面の弱さの克服、代表決定後のトレーニング方法の見直し、日本チームとしてのレース戦略の徹底を計る事が今後の課題だと考える。

〈ハードル〉 **（ハードル部長　櫻井健一）**

ハードル部としての目標は110mHでは準決勝進出、男女400mHは決勝進出と男子はメダル獲得を目標としていた。目標設定として高めに設定し、強化を進めてきたが結果として110mHと女子400mHは予選敗退。400mHは準決勝敗退という結果であった。この結果を受けての課題として110mHでは矢澤航選手の持ち味が全く出せない結果であった。レース前半で流れを作り後半勝負という形でレースをさせてもらえなかった。この点は今後海外遠征の機会を増やし13秒前半での戦いに慣れる必要があると感じた。また、スプリント力の向上はもちろんのこと技術的にもハードルに対する踏み切り速度の向上を目指していきたい。そのための技術的分析も強化として行っていきたい。

400mHでは野澤啓佑選手が予選で自己記録を更新し実力を発揮できたが、やはり勝負所である準決勝で力を出し切れなかった。ただあと一歩で決勝に進出できるという手応えは掴めたのは間違いないだろう。昨年の世界陸上と同様に世界大会の準決勝は予選とはレースの流れが全く異なるので、速いレース展開の中で自分を見失わないような経験値が必要だと感じた。今後はダイヤモンドリーグなど積極的な転戦を行えるようにしていきたい。松下祐樹選手はレース前半の遅れが響いて記録が出せなかった形なので今後はスピード強化と合わせて前半の強化を進めていきたい。

女子400mHでは久保倉里美選手が3大会連続での準決勝進出を目指したが予選で敗退となってしまった。トレーニングも順調であったがレース前に降り出した雨と低温の状況、更にレース時間が予告なしに遅れたことなど久保倉選手にとって厳しい条件が重なってしまったことが悔やまれる。もちろん全選手の条件は一緒なのだから言い訳にしてはならないことでもある。しかし年齢的なものと脚の状況を考えると不利益は大きかった。私自身のサポートが至らなかった点を深く反省したい。

ハードル部としては全体的な底上げなど強化の成果は出てきていたが、五輪で戦うレベルにはまだ磨かなければならないことがたくさんある。今後はこれらを精査して新たな強化委員会に引き継ぎたいと思う。

〈跳躍〉 **（跳躍部長　吉田孝久）**

跳躍ブロックは、他ブロックと同様に、ニュージャージーでの事前合宿を行い、時差調整ならびに試合までのコンディショニングチェック等をそこで行いながらリオデジャネイロ・オリンピックを迎えた。

リオデジャネイロ・オリンピックの跳躍種目は、陸上競技の大会２日目から行われ、８月13日の男子棒高跳には、澤野大地選手、山本聖途選手、荻田大樹選手の３選手が出場した。今大会が３度目のオリンピックとなる澤野選手は、５m45から競技を開始し、これを１回目にクリアすると続く５m60も１回目に超えて予選通過を確実にした。５m70は僅かに触れてクリアならなかったものの決勝に向けての手応えをつかむことができたようであった。一方、５m30の高さから競技を開始した荻田選手は、この高さを２回目にクリアし、続く５m45を１回目にクリアしたものの、続く５m60を超えることができず決勝に駒を進めることができなかった。また、ロンドン大会に続く出場となった山本選手は、最初の５m45をクリアすることができず記録なしという残念な結果に終わった。

男子棒高跳の決勝は15日に行われ、日本選手としてただ一人決勝にコマを進めた澤野選手は、豪雨による中断にも慌てず、ベテランらしい落ち着いた試合運びで最初の高さの５m50を１回目にクリア

該当ラウンドはありません

	日付	予選	日付	準決勝	日付	決勝
		欠場				
	8/15	23.21 (5/h7) +0.5m/s 落選	8/16		8/17	
	8/16	15:23.41 (7/h1) 決勝進出			8/19	15:34.97　15位
	8/16	15:29.17 (9/h2) 落選			8/19	
	8/16	15:41.81 (12/h2) 落選			8/19	
						欠場
					8/12	31:36:44　18位
					8/12	31:44:44　20位
	8/13	9:58.59(17/h1)　落選			8/15	
	8/15	57.34 (5/h6) 落選	8/16		8/18	
	8/16	5m87 (19/B) +0.3m/s 落選			8/17	
	8/16	57m68 (10/B) 落選			8/18	
					8/19	1:32:42 16位
					8/14	2:29:53 14位
					8/14	2:31:12 19位
					8/14	2:37:37 46位

した。続く５m65は惜しくもクリアできなかったものの実に64年ぶりとなる７位入賞を果たした。

14日には男子走高跳が行われ、これには衛藤昂選手が出場した。衛藤選手は２m17を１回目にクリアして順調な立ち上がりをみせたが次の２m22が跳べずに予選敗退が決まった。ニュージャージーの合宿では好調であったのでこの結果は残念なものであった。

15日には男子三段跳が行われ、これには長谷川大悟選手と山下航平選手が出場した。長谷川選手は１回目に16m17、山下選手も１回目に15m71を跳んだが、二人とも2回目以降に記録を伸ばすことができず予選敗退が決まった。ともに今大会が初めての世界大会で経験不足を露呈した結果となってしまったが、年齢も若く、この経験を今後に活かして欲しい。

16日には女子走幅跳が行われ、甲斐好美選手が出場した。１回目、２回目とファールをし、３回目に何とか足をあわせることができたが、記録は５m87という結果で予選落ちに終わった。

〈競歩〉　（競歩部長　今村文男）

今大会に向けては、①世界基準の競歩技術、②国際審判（IRWJ）対策、③コンディショニングの３項目を重点課題として掲げて取り組んだ。具体的な取り組み例として、IRWJによる歩型判定のトレンドの把握と審判招聘、外国人コーチの招聘と技術指導、専任スタッフによるコンディションケア、医科学サポートの充実や支援体制の強化などが挙げられる。

種目別の総評として、今季世界ランキング上位独占をしている男子20km競歩に注目が集まったが、レース後半のペース変動や最大スピード時の競歩技術の完成度などから確実に入賞することが現実的な目標であった。そのような中で積極的にレースを動かした松永大介選手がこの種目において、五輪史上初の7位入賞を果たした。男子50km競歩においては、2015年世界陸上北京大会と同様の強化練習や調整ができたこともあり、手応え通りの結果であった。荒井広宙選手については、レース後半はメダル獲得が現実的な目標となり45km以降は守りの展開となり積極性に欠けたが、競歩種目で五輪史上初の銅メダルはチームに勢いをもたらす結果であった。また、残念だったのは、谷井孝行選手、森岡紘一朗選手が序盤から遅れ、入賞ラインでレースをすることができなかった点である。

女子20km競歩においては世界との差を感じる結果となったが、岡田久美子選手については、暑さを考えたペース配分で、レース後半のペースダウンを最小限に抑え、かぶり水や給水などの暑さ対策が功を奏して、ラスト５kmからのペースアップで順位を上げることができたことは収穫であった。IRWJの歩型判定については想定範囲であったが、男女20km競歩においては、周回が１kmのため上位でレースをするには更に動きの精度を高めていく必要性を感じた。

また、50km競歩においては、暑熱環境下において競技時間が長いため熱疲労による途中棄権や歩型観察の時間が長いため失格者数が、3種目の中で最も多かったことから、引き続き暑さ対策と競歩技術を高める方策を検討していかなければいけないと感じた。

〈混成〉　（混成部長　松田克彦）

ロンドンオリンピック以降、リオでの入賞（又は一けた順位）を目標として強化を進めてきた。そして、リオデジャネイロ・オリンピックでは、1928年アムステルダム・オリンピック以来88年ぶりに複数（２名）で臨んだ大会であった。男子十種競技は32名が出場し、そのうち25名が最終種目までやり終えた。優勝はアメリカのイートンが8890点の大会タイ記録で順当勝ちし、今年好調のフランスの新鋭メイエールが8834点の大幅な自己新記録で続いた。右代啓祐選手は7952点（ロンドン・オリンピック：7842点）で20位、中村明彦選手は7612点で22位であった。８位入賞が8330点（ロンドン・オリンピック8219点）で、右代選手の自己ベストと同等であった。

両名とも良い仕上がり状態で大会を迎えたが、右代選手は、６月の骨折の影響は否めず、１か月半の期間では治療と身体を整えることに集中するしかなかった。また、開会式に騎手として参加したことにより疲労等の心配をしたが、結果的にモチベーションの向上に繋がり、良い緊張感を与える結果となった。今大会は、これまでの国際大会では一番良い流れで試合を進めることが出来ただけに、スプリント種目、走幅跳の不安定要素をクリアすればもっと上位で戦えると感じた。

中村選手は100m（11秒台は初）の結果がすべて影響した。試合直前まで、自己記録を出した６月よりも身体の状態が良かっただけに、自己のイメージとの擦り合わせにズレが生じた。本来やるべき内容と全く違うことを意識して試合が進んでしまった。また、オリンピックに出場するためにエネルギーを使ってしまい、世界で戦う準備を整えることが出来なかった。身体は回復していたが、メンタル部分の回復にも充分配慮して進める必要があった。今後の課題として海外での試合経験はもちろんであるが海外拠点を作り、そこから生活及び試合に臨む環境整備、オリンピックに行く以前に出場するメンバーとの大会を重ねる必要性を更に強く感じた。

〈投てき〉　（投てき部長　等々力信弘）

投てきからは、やり投に男女各１名が出場した。まず女子やり投に出場した海老原有希選手については、予選、１投目に53m75、２投目に55m89、３投目57m68と記録をのばしたが、予選全体の21位で決勝へ進めない結果であった。予選通過は61m63であり、海老原選手の力で有ればマークできる記録で有り、２投目に槍が右サイドに流れた失敗が悔やまれる結果であった。

男子やり投の新井涼平選手は、予選１投目に予選通過記録（83m）を超える84m16をマークし、予選全体で４位の記録で決勝に進出した。予選の状況から決勝では十分に入賞以上が狙える状態ではあったが、決勝では１投目に77m98をマークし、２投目に79m47まで記録を伸ばしたが、３投目 72m49に終り全体の11位で、ベスト８に残れない結果であった。ベスト８の記録が82m42で、新井選手の力であれば十分に入賞は出来た大会であっただけに非常に残念な結果であった。

第24回日・韓・中ジュニア交流競技会報告

日本代表選手団団長　三國　一成

日韓中ジュニア交流大会の趣旨としての「友好」・「進化」・「未来」を念頭に置き、日本陸連との連携を密にしながら、この大会をこれからの国際大会への登竜門と位置づけ選手の選考を行っています。そのために、全国高校総体の結果を待っての選手決定となり日本体育協会の方にはいろいろな面でご無理を聞いて頂き感謝申し上げます。

この大会の位置づけも高等学校の指導者の方々にもご理解をいただきここ数年は、高校総体の上位入賞者で編成することができるようになってきました。今年度も参加選手22名中16名が総体優勝者でU-20世界選手権に出場した選手も含まれ、チームJAPANとしては安定感のあるチームができあがりました。

出発前のミーティングでは、「素晴らしいメンバーが揃った。日本代表としての喜びと誇りを持ってチームJAPANとして取り組んで行こう。また、この大会をとおして何でも良いから今後の競技人生に大きくプラスとなるような「きっかけ」を持って帰ろう。」と話し、それぞれが課題を持って試合に臨むことを伝えました。

海外では、国内のように恵まれた環境の中での競技運営等は望めないことも多くあることも伝え自分たちで考えながらコンディショニングをするよう選手たちに伝えました。

実際に競技場に関しては、学校の中の施設ということもあり、トラック・フィールド、用器具等は、「ひと昔前の競技場」という感想を持ちました。この環境下で出した記録が公認記録として認められるものなのかという不安も正直ありました。

そのような条件の中で選手たちは素晴らしいパフォーマンスを見せてくれました。24種目行われた競技中、大会両日とも15種目で一位という素晴らしい結果を納めることができました。トラック種目では２試合とも圧勝しましたが、フィールド種目については、韓国・中国チームの活躍が目立ちました。その中で好成績を挙げた選手は、男子砲丸投の岩佐　隆時君（北陸３）が第２戦目で17m39のパーソナルベストを記録で第２位に、女子走幅跳の高良　彩花さん（園田学園１）が、６m18のパーソナルベストを記録し優勝をはたしました（優勝記録は６m19＋3.6）。その他の選手も全体的には、調整が難しいこの時期としては良いパフォーマンスを発揮したと思います。初めての海外での試合をした選手も多く、多くの事を学び、感じることができた大会となったと思います。

試合を見ていて感じたことは、３か国のトップともいえる選手が競技を行っていますが、観客も無く、応援の声も無い（チームJAPANの応援の声は響いていました）中での競技会は寂しさを感じました。同時に、各種目の参加人数も３か国対抗なので致し方ないのでしょうが、３人あるいは４人と少なく（種目によっては２人のものもあり）盛り上がりに欠けるきがしました。地元の選手をより多く出場させることはできないものかと思いました。（トラック・フィールドとも８名の選手が出場できると盛り上がりも期待できると思います。そうすることにより出場する選手も一段とパフォーマンスを発揮できると思います。次回は日本での開催になるので、より多くの選手が出場できるようお考えいただけるとありがたいです。）

競技終了後に、韓国チームと日本チーム全員で記念撮影をすることができ、友好関係も深まった気がします。中国選手団の姿が見えなかったことが少し残念でした。地元の選手も含め数多くの選手が集まることで友好の輪もさらに広がっていくものと思います。

宿泊関係については、高級感のあるホテルで部屋も広く十分にくつろぐことができて良かったと思います。食事に関しては、ビュッフェスタイルで会場も広くゆっくりと食事が取れる状況でしたが、料理の味付けが日本と違っているようで戸惑っている選手を見かけました。ホテル内のコンビニについても、事前の写真と少し違っていたようで、ほしいものがあまりなかったように感じました。ホテル周辺にも適当な施設があまり見受けられず不便を感じている様子が見られ、これも海外遠征の一つとしてとらえ良い勉強になったと思います。

開会式及びフレンドシップ交流会については、３カ国の選手がうまく交流ができるようよくまとまった内容で構成されていてよかったと思いました。

陸上競技では、試合後、選手同士でプレゼント交換や記念撮影、手振り身振りの怪しい英語で交流を図ったり、中にはスマートフォンの翻訳ツール アプリを駆使してコミュニケーションを図ったりする選手もいました。いずれの選手も語学力の重要性を感じ取ったようでした。国は違っても同じ世代の若者同士。笑顔ですぐにお互いを認め合いコミュニケーションを図る様子は、大変に心温まるもので、選手自身の大きな財産となると確信をしています。

最後になりますが陸上競技担当のボランティア通訳のYU HUINANさんと PAN XUANさんには、一週間にわたり献身的にご協力を頂き、不自由なく過ごす事ができました。地元のボランティア通訳の人達との交流もこの競技会の大きな意味を成していると同時に、大いに感謝申し上げたいと思います。

最後に今回のような貴重な経験をさせていただく機会を与えていただいた日本体育協会のみなさまに感謝するとともに、参加選手団一同が今後のそれぞれのステージに繋げていくことを祈念して感想とさせて頂きます。

※リザルトはこちら　→http://www.jaaf.or.jp/taikai/1398/

第24回日・韓・中ジュニア交流競技会　陸上競技　日本代表選手団

	区分	出場種目	ふりがな 氏名		性別	所属
1	団長		みくに	かずしげ	男	全国高等学校体育連盟陸上競技専門部　事務局長
			三國	一成		東京都立府中高等学校
2	監督		ひょうどう	しげのり	男	高知県立高知工業高等学校
			兵頭	重徳		
3	コーチ		おおばやし	かずひこ	男	広島県立西条農業高等学校
			大林	和彦		
4	コーチ		のぐち	まさつぐ	男	東大阪大学敬愛高等学校
			野口	雅嗣		
5	マネージャー		かわぐち	まさし	男	静岡県立韮山高等学校
			川口	雅司		
6	トレーナー		みやざわ	なお	女	リキュアセラピールーム
			宮澤	那緒		
7	選手	100m/400mR	みやもと	だいすけ	男	洛南高等学校
			宮本	大輔		2年
8	選手	200m/400mR	そめや	よしひろ	男	つくば秀英高等学校
			染谷	佳大		3年
9	選手	400m/400mR	こくぼ	ともひろ	男	桜丘高等学校
			小久保	友裕		3年
10	選手	1500m	いいお	りょうへい	男	愛媛県立八幡浜高等学校
			飯尾	亮平		3年
11	選手	110mH/400mR	かとう	たくま	男	新潟県立新発田高等学校
			加藤	拓馬		3年
12	選手	走高跳	おおにし	けんすけ	男	大阪府立大塚高等学校
			大西	健介		3年
13	選手	走幅跳/400mR	はしおか	ゆうき	男	八王子学園八王子高等学校
			橋岡	優輝		3年
14	選手	三段跳/400mR	みずたに	つかさ	男	北海道帯広農業高等学校
			水谷	司		3年
15	選手	砲丸投	いわさ	りゅうじ	男	北陸学園北陸高等学校
			岩佐	隆時		3年
16	選手	円盤投	さくち	そうた	男	青森県立弘前実業高等学校
			菊池	颯太		3年
17	選手	やり投/砲丸投	いけがわ	ひろし	男	滝川第二高等学校
			池川	博史		3年
18	選手	100m/400mR	いとう	ゆうな	女	岐阜県立岐阜商業高等学校
			伊藤	有那		3年
19	選手	200m/400mR	さいとう	あみ	女	岡山県立倉敷中央高等学校
			齋藤	愛美		2年
20	選手	400m/400mR	あおき	りん	女	相洋高等学校
			青木	りん		3年
21	選手	800m	かわた	あやか	女	東大阪大学敬愛高等学校
			川田	朱夏		2年
22	選手	1500m	ごとう	ゆめ	女	兵庫県立西脇工業高等学校
			後藤	夢		2年
23	選手	100mH/400mR	たなか	ゆみ	女	関西大学第一高等学校
			田中	佑美		3年
24	選手	走高跳/400mR	あさい	さくら	女	岡崎城西高等学校
			浅井	さくら		3年
25	選手	走幅跳/400mR	こうら	あやか	女	園田学園高等学校
			高良	彩花		1年
26	選手	砲丸投	おやま	ほのか	女	兵庫県立姫路商業高等学校
			尾山	和華		3年
27	選手	円盤投/砲丸投	おおかわら	あずさ	女	茨城県立土浦湖北高等学校
			大河原	梓		3年
28	選手	やり投	おさ	まひろ	女	和歌山県立和歌山北高等学校
			長	麻尋		2年

デカネーション2016（マルセイユ／フランス）大会報告

強化委員会 女子短距離部長　瀧谷　賢司

１．はじめに

デカネーション2016が９月１３日、フランス・マルセイユのスタッド・デロールで開催された。日本選手団は男子10名、女子10名、役員９名のチーム編成で臨んだ。主将は男子 山本聖途、女子　木村文子を任命した。選手構成はリオ五輪代表５名、日本選手権優勝者11名、全国インターハイ優勝者３名という充実したメンバーであり、東京五輪に向けて１歩目を踏み出せる大会であった。今大会は「結果にこだわらず､思い切った力の発揮」をテーマにして、各選手が今のレベルの位置を把握し、次のステージへのきっかけを身体で感じてもらうことを期待して、大会に臨んだ。熟練選手、中堅選手、若手選手のバランスも良く国際経験には最適な大会となった。

２．大会の概要

今年のデカネーションは６の国および選抜チーム（日本、フランス、中国、ウクライナ、北中米カリブ選抜、DECACLUBS（フランス陸連登録の外国籍競技者で構成された選抜チーム））が出場。男女各10種目の順位による得点で競う国別対抗戦の大会である。毎年開催されており､今年が12回目の開催で､日本は３回目の出場となった。リオ五輪メダリストやダイヤモンドリーグ年間上位の選手も出場していた。MCが積極的に観客を煽り、テンポ良い音楽を流し、種目間や閉会式にはダンサーによるパフォーマンスが披露されるなど、競技者や観客が楽しめる「お祭り」の雰囲気があった。

３．生活環境

マルセイユの天候は、連日30度越えの気温であったが、湿度が低く爽やかな好天に恵まれ最高のコンディションであった。大会当日は、風がやや不規則に吹き、記録を狙うには難しい条件になった。競技場は、サブトラックが併設されておらずウォーミングアップに支障があった。宿舎となったホテルは、若干問題はあったが、競技に影響するほどではなかった。食事はバイキング形式で特に問題はなかった。大会会場までのアクセスは、大型バス15分程度で負担はなかった。マルセイユの町並みは､ヨーロッパの空気が漂い非常におちついた。

４．競技会運営

大会は、日本の大会と違ってゆっくりと進行していた。スタートリストの情報配信は遅かった。前日のスターターによる公式練習では英語によるコールであったが、当日はフランス語によるコールであった。フィールド競技に関しては、4回試技であった。競技施設に関しては旧式の器具が多かった。全般的には、競技役員には問題は無く友好ムードで進行していた。

５．競技結果

日本は、団体戦で昨年７チーム中６位であったが、今年は６チーム中４位に入った。（１位フランス115点、２位北中米カリブ 109点、３位ウクライナ102点、４位日本92点、５位中国68点、６位DECACLUBS64点）。個人ではウォルシュ ジュリアンが46.09で男子400m、戸田雅稀が5:14.39で男子2000mを制した。また、木村友香が5:47.17で女子2000mの日本新記録を達成。 学生に関しては、日本インカレから１週間しか中日が無く疲労感が感じられた。しかし、色々な状況のなかでも力を発揮できる選手に成長してもらいたい。高校生については、世界のレベルを肌で感じてもらい焦らず成長を期待したい。

６．最後に

今回同行して頂いた日本陸連事務局をはじめ、大会に向けてご協力頂いた各所属の指導者の方々、スタッフの方々には厚くお礼申し上げます。お蔭様で、滞在期間中故障者も無く大会に臨む事ができました。今大会の選手達は、マナーも良く次ぎのステージに向かえる選手であると強く感じました。東京五輪に向けて、より一層自立した選手を目指して精進していく事に期待したいと願っています。ご苦労様でした。

日本選手団　選手20名・役員9名

役職	氏名	役職･所属
団長	尾縣　貢	専務理事
監督 女子短距離･ ハードルコーチ	瀧谷　賢司	強化委員会 女子短距離部 部長
男子短距離･ ハードルコーチ	土江　寛裕	強化委員会 男子短距離部 副部長
男女 中長距離コーチ	平田　和光	強化委員会 中距離部 部長
跳躍コーチ	吉田　孝久	強化委員会 跳躍部 部長
投擲コーチ	野口　安忠	強化委員会 強化育成部 委員
トレーナー	村上　博之	医事委員会 トレーナー部 委員
渉外	大嶋　康弘	日本陸連事務局
渉外	淺田　大吾	日本陸連事務局
100m	桐生　祥秀	東洋大学
200m	原　翔太	スズキ浜松AC
400m	ウォルシュ ジュリアン	東洋大学
800m	三武　潤	日本大学
2000m	戸田　雅稀	日清食品グループ
110mH	矢澤　航	デサント
三段跳	山本　凌雅	順天堂大学
棒高跳	山本　聖途	トヨタ自動車
砲丸投	中村　太地	チームミズノ
円盤投	堤　雄司	群馬綜合ガード
100m	齋藤　愛美	倉敷中央高校
400m	青山　聖佳	大阪成蹊大学
800m	福田　翔子	松江北高校
2000m	木村　友香	ユニバーサルエンターテインメント
100mH	木村　文子	エディオン
400mH	久保倉里美	新潟アルビレックスRC
走幅跳	ヘンプヒル　恵	中央大学
走高跳	浅井さくら	岡崎城西高校
砲丸投	太田　亜矢	福岡大学
円盤投	中田恵莉子	四国大クラブ

第205回、第206回 国際陸上競技連盟(IAAF)カウンシル会議 報告

会長　横川　浩

第205回国際陸上競技連盟カウンシル会議（2016年８月10日）及び第206回同会議（８月20日）がブラジル・リオデジャネイロで開催されたので、国際陸上競技連盟（IAAF）のカウンシルメンバーとして参加した。同会議の概要は以下の通りである。

１．ロシア問題

・ロシア人選手のリオ・オリンピックへの出場資格について、IOC決定、CAS裁定を含めた報告が行われた。今後、ロシア陸連の資格停止処分については、調査部会が状況調査を継続し、定められた基準に従い審査を行った上で、ロシア陸連の早期資格回復を目指す。

・IAAFはドーピング問題に対し強い姿勢で取り組み、スポーツ界のリーダーとして、信頼性を回復し、高潔性を守るために、その戦いを継続して行う。IOCが、各競技団体にロシア人選手のリオ・オリンピック参加資格問題の対応を委ねた事により、各競技団体には混乱が見られるが、IAAFは自身の経験を他のスポーツ競技団体と共有していく。

２．ガバナンス体制の改革

・ガバナンス体制改革検討部会が最終提案を行い、承認された。これにより、2016年12月３日に臨時総会をモナコで開催する事を決定し、本件を審議する。

・改革案は、次の点を基本とした内容となっている。①役割、責任の明確化　②選手の声を反映させる体制　③ジェンダーバランス　④独立したアンチ･ドーピング、インテグリティー、懲戒機能

・最終提案の主な内容は以下の通りである。

①コングレス：“IAAF及びスポーツの最高権威”の政策決定機関とする。総会開催時以外で、コングレスの決議が必要になった場合は、書面での投票も認める。総会には３名まで参加出来るが、２名以上参加の場合には、男女からの参加が必要。

②コンベンション：総会と同時開催し、加盟団体、選手、コーチ、スポンサー、陸上関係者等多くの参加者を募る。

③カウンシル:“スポーツのガーディアン”としての責務を担う。陸上に関連する全ての案件の決定権があり、規則や規程の承認、大会開催地や大会カレンダーの決定、コミッションの任命、IAAF戦略プランの承認等が挙げられる。
カウンシルメンバーは26名で構成され、会長１名、副会長４名（男女各２名）、エリア代表６名、アスリート・コミッション２名（委員長１名と委員１名）、選挙で選出される13名となる。ジェンダーバランスを考慮し、2019年選挙では、26名の内、少なくとも９名（副会長の２名を含む）を各性別から選出する。加えて、2023年には、各性別からの選出を最低13名と増やし、男女比を半々とする。任期は４年で、最長３期、年令制限を廃止する。

④エグゼクティブ・ボード（EB）：“IAAFのガーディアン”として、IAAFのビジネスに携わる決定に対して責務を負う。メンバーは９名で構成され、会長、副会長（４名）、委員（３名を外部又は陸上関係者から選出）、CEO（投票権は無い）から成る。各性別から少なくとも３名を含める。任期は４年、最長３期とする。EBは定期的に会合を開催する。EBに財務、監査等のサブ・コミッティーを設置し、これにより、現財務役員(Treasurer)のポストは廃止する。

⑤会長：陸上界のリーダーとして、“スポーツ及びIAAFの顔”となる。会長が重要案件を単独で決定する状況を防ぎ、チェック機能を強化する。会長としての任期は４年、最長３期とするが、カウンシルメンバー又はEBメンバーとしての任期を含めると最長５期とする。

⑥副会長：４名とし、内1名を上席副会長に任命する。各副会長には、担当分野が任命され、EBの一員としての役割も加わるので、その仕事量や責務の増加を考慮し、エリア会長やアスリート・コミッション代表のカウンシルメンバーの職務を兼任する事は出来ない。

⑦CEO（Chief Executive Officer）：IAAFのマネージメントの責任者である事を踏まえ、現在のGeneral Secretaryという役職名をCEOに変更する。

⑧コミッション：2019年から、コミッティーを廃止し、全てコミッションとする。コミッションの数や活動について、2017年から検討する。各加盟団体はコミッションメンバーを推薦する事が出来、各々の専門知識や経験を精査し、エリアバランス、ジェンダーバランス等を考慮した上で選出する。

⑨IAAF関係者のエリジビリティー：IAAFの活動に携わるには、公私の利害対立が無いか等の審査基準を満たさなければならない。３名から成る審査パネルを設置する。

⑩行動規範（Integrity Code of Conduct）：現在の倫理規定とIAAFルールの行動規範を統一化する。

⑪インテグリティー・ユニット：ドーピングを含めた全てのインテグリティーの問題に対し、教育、検証、調査、告発を行う独立機関として、2017年４月３日から機能させる。

⑫懲戒審判所（Disciplinary Tribunal）：行動規範に対する違反の有無を精査し、制裁を科す独立機関として、現倫理委員会の役割も移行して、2017年４月３日から機能させる。

⑬監査：2019年より、新たな外部監査を財務、ガバナンス機能に対して実施し、報告を行う。

⑭透明性を保つための基準（Transparency Standards）：新たな基準を設け、IAAFルールに組み入れる。

・上記の提案内容は、インテグリティーに関連する改革は2017年から、それ以外の部分は2019年から導入される。よって、２つのIAAF憲章（2017憲章と2019憲章）が、12月の臨時総会で諮られる。副会長、カウンシルメンバー、EBの構成については、2019年総会選挙後の導入となる。

３．ワーキンググループの設置

・IAAFは、国籍変更、年令詐称、記録の信憑性に関する問題点を重視し、新たなワーキンググループを設置した。筆者が、国籍変更に関するワーキンググループの委員長に任命された。

４．IAAF国際競技会

・2017年のIAAF大会（ワールドチャレンジ、クロスカントリー・パーミット、世界競歩チャレンジ）のカレンダーが承認された。又、2018年世界ハーフマラソン大会（スペイン・バレンシア）の実施日は、2018年３月24日（土）で決定した。

・ロシアの資格停止処分の継続に伴い、2018年世界競歩チーム選手権の新たな開催地の募集を行う。

・2019年の世界リレーをバハマで開催する。

・2019年世界選手権（ドーハ）の開催日程を９月28日から10月６日とする。

・U18世界選手権は、2017年のナイロビ大会の開催を最後に取りやめ、U18はエリアレベルでの大会に重点を置く。

５．その他

・国際トレイルランニング協会を、世界マウンテンランニング協会、国際ウルトラランナーズ協会と同様に、IAAFの公認国際組織とする。

・リオ・オリンピックの開催にあたっては、様々な課題があったが、関係者が力を結束して成功に導いた。選手のめざましい活躍により、８月20日現在、世界記録３、エリア記録10、オリンピック記録９、国内記録93（65か国）が樹立された。

インターハイにおける科学委員会研究活動報告

科学委員会委員　貴嶋孝太

1．活動の概要

第69回全国高等学校陸上競技対校選手権大会（2016中国総体。インターハイ）が2016年７月29日から８月２日までの間、岡山県岡山市のシティライトスタジアム（岡山県総合グラウンド陸上競技場）にて開催されました。全国11ブロックの地区予選会を勝ち抜いた高校生アスリートが集い、熱戦が繰り広げられました。

科学委員会では、インターハイに出場する高校生アスリートを対象として、①バイオメカニクス研究活動のためのデータ収集と、②体調・食生活状況・スポーツ障害およびサプリメント摂取に関する調査を実施いたしました。①の研究活動は第46回大会（1993年、栃木）から、②の調査は第57回大会（2004年、島根）から大会主催者をはじめ大会関係者の皆さまのご協力を得ながら毎年継続して実施しております。インターハイで収集したデータは分析後に日本陸上競技連盟のホームページ、陸上競技研究紀要、陸上競技マガジン等で公表しております。加えて、2014年度からは全国各地区で開催される高体連合宿における指導者研修会や、オリンピック育成競技者研修合宿における競技者への講義等において研修資料として利用されています。これらの研修会において、インターハイで収集したデータや種々の科学的データは、それまで取り組んできたことの確認や現状を把握するために使われたり、目標値との比較や今後のトレーニングを創造したりすることに利用できることを紹介しています。

高校生に代表されるジュニア期のアスリートを対象とした科学的データは、縦断的に分析したり他の選手（シニア選手や日本・世界の一流選手）と比較・分析したりすることでその選手の特徴を知ることができます。さらにはパフォーマンス向上（または低下）の要因を探る手掛かりにもなりえると考えます。このような観点に立ち、高校生の現状を広く捉えることを考え、多くの選手の分析が行えるような準備をして活動を行いました。

2．活動メンバー

以下に示す科学委員会委員と協力員の計16名で実施しました。活動メンバーは、短距離･ハードル、中･長距離、跳躍、投てきの４班を編成し、それぞれの種目について活動を行いました。

〈短距離・ハードル〉◎貴嶋孝太（幹事）、福田厚治、柴山一仁、山元康平、山本真帆、安藤柊之介

〈中・長距離〉◎杉本和那美、伊澤賢人

〈跳躍〉◎清水悠、村木有也、柴田篤志、久保理英

〈投てき〉◎高松潤二、山本大輔、広瀬健一、野中愛里

※順不同、敬称略。◎印はチーフ。

3．活動内容

１．にも示しました通り、インターハイにおいて①バイオメカニクス研究活動のためのデータ収集と、②体調・食生活状況・スポーツ障害およびサプリメント摂取に関する調査をそれぞれ実施いたしました。

3－1．バイオメカニクス研究活動のためのデータ収集について

レース中の走速度や走動作・投動作分析をするために、観客スタンドまたはグラウンドレベルから民生用デジタルビデオカメラを使って選手らを撮影しました。跳躍種

女子100m決勝　レース分析速報

選手名	記録（秒）	最高スピード m/s	最高スピード 出現区間	距離（m）項目	21.5m	30.0m	38.5m	47.0m	55.5m	64.0m	81.0m	100.0m
齋藤愛美（2年・岡山・倉敷中央）	11.78	9.62	38.5-47.0m	time(s)	3.40	4.33	5.23	6.12	7.00	7.89	9.70	11.78
				lap(s)	3.40	0.93	0.90	0.88	0.88	0.89	1.80	2.08
				speed(m/s)	6.32	9.11	9.44	**9.62**	9.62	9.53	9.42	9.12
伊藤有那（3年・岐阜・県岐阜商）	11.98	9.49	38.5-47.0m	time(s)	3.45	4.38	5.29	6.18	7.09	8.00	9.83	11.98
				lap(s)	3.45	0.93	0.90	0.90	0.91	0.91	1.83	2.15
				speed(m/s)	6.23	9.11	9.40	**9.49**	9.36	9.36	9.27	8.85
佐々木梓（3年・大阪・東大阪大敬愛）	12.03	9.32	30.0-38.5m	time(s)	3.43	4.37	5.28	6.19	7.11	8.03	9.88	12.03
				lap(s)	3.43	0.93	0.91	0.91	0.92	0.92	1.86	2.15
				speed(m/s)	6.26	9.11	**9.32**	9.32	9.27	9.27	9.15	8.85
佐藤芹香（2年・宮城・古川黎明）	12.17	9.19	38.5-47.0m	time(s)	3.43	4.38	5.31	6.23	7.17	8.10	9.98	12.17
				lap(s)	3.43	0.94	0.93	0.93	0.93	0.93	1.88	2.20
				speed(m/s)	6.26	9.03	9.11	**9.19**	9.11	9.11	9.07	8.66
東　直美（3年・愛知・豊橋南）	12.18	9.19	47.0-55.5m	time(s)	3.48	4.42	5.35	6.28	7.21	8.13	10.02	12.18
				lap(s)	3.48	0.94	0.93	0.93	0.93	0.93	1.88	2.16
				speed(m/s)	6.19	9.03	9.11	9.11	**9.19**	9.19	9.03	8.78
臼井文音（1年・北海道・立命館慶祥）	12.20	9.15	38.5-47.0m	time(s)	3.40	4.36	5.30	6.23	7.17	8.10	10.01	12.20
				lap(s)	3.40	0.96	0.95	0.93	0.93	0.93	1.91	2.19
				speed(m/s)	6.32	8.87	8.99	**9.15**	9.11	9.11	8.91	8.67
朝野夏海（3年・富山・水橋）	12.23	9.27	30.0-38.5m	time(s)	3.49	4.43	5.35	6.28	7.21	8.15	10.04	12.23
				lap(s)	3.49	0.94	0.92	0.93	0.93	0.94	1.89	2.19
				speed(m/s)	6.16	9.03	**9.27**	9.19	9.11	9.03	9.01	8.67
澤谷柚花（2年・岡山・倉敷中央）	12.39	9.11	30.0-38.5m	time(s)	3.53	4.49	5.43	6.36	7.29	8.23	10.15	12.39
				lap(s)	3.53	0.96	0.93	0.93	0.93	0.94	1.92	2.24
				speed(m/s)	6.08	8.87	**9.11**	9.11	9.11	9.03	8.87	8.48

※　100メートルハードルの設置地点で計測を行ないました。　（風速 -1.6m/s）

図１　タイム分析結果一例（女子100m決勝）

目ではレーザー式距離・速度計測器を使って助走速度を計測しました。それぞれの撮影や測定に必要なキャリブレーション作業は、競技の前後に行うことができました。

大会期間中は、活動メンバーの分析作業、休憩および機材の保管場所として、メインスタンド４階の会議室を使用させていただきました。ここは毎朝行われる主任者会議室と兼ねていましたが、十分な作業環境（スペースや空調）が確保され、滞りなく作業をすることができました。また、電源を使用できたことで機器の充電をすることもできました。

３－２．分析データとフィードバックについて

トラック競技では撮影した映像を使い、スタートから各分析地点を選手が通過するまでの時間を調べ、区間ごとの時間や平均の走速度を算出しました。決勝を対象レースとして、選手らの結果を表およびレース中の走速度変化を示すグラフにまとめました（**図1**、**2**）。また、優勝者の走動作を観察するために、撮影したビデオ映像を編集して連続写真を作成しました（**図3**）。跳躍競技では計測値をまとめ、助走開始から踏切までの助走速度の変化を表とグラフに示しました。投てき競技では、撮影した映像を基に投てき物の速度、投てき角度などの分析結果を図表にまとめ、優勝者の連続写真とともに図示しました。

収集した映像や計測値はできるだけ速やかに分析を行い、分析結果や連続写真を速報値として分析データ掲示板（大会側に準備いただいた掲示板）に掲示しました。この掲示板はスタートリストやリザルト等の掲示板に並べて設置されていたため、多くの方に閲覧いただきました。余談ですが、データを貼付している筆者のところへ一般の方が質問に来られました。話を伺うと、インターハイ出場を目指しているお子さんの練習のために情報を探しに来られたとの事でしたので、その場でデータの解説をしました。ご説明すると「練習のためのいいヒントになった」と喜んでおられ、私たちの活動が少しお役に立てたかもしれないと感じました。

なお、各種目の優勝者とその指導者にはご要望に応じてデータや写真を提供いたしました。また、最終日に実施された種目は大会終了後に分析し、大会データ集としてまとめています。

３－３．体調・食生活状況・スポーツ障害およびサプリメント摂取に関する調査について

昨年度までは、科学委員会が作成した質問紙を会場にて各種目の入賞者に手渡しし、回答後に日本陸連へ返送していただく方法で調査を実施しておりました。しかしながら、この方法ではコストや時間（質問紙作成や質問への解答、質問紙の回収、分析）がかかりました。そこで今年度はそれらを軽減するために今年度は「Google フォーム」を利用してインターネット上で質問調査を実施いたしました。フォームは科学委員会の担当者が作成し、フォームのURLおよびQRコードを付けた調査依頼書（A4用紙１枚）を、表彰者招集所にて各種目の入賞者全員へ配布いたしました。回答いただいた内容は、科学委員会で集計、分析を行います。

４．さいごに

2016中国総体（インターハイ）におけるバイオメカニクス研究データは、日本陸上競技連盟のホームページに掲載されダウンロードすることが可能です。また分析した一部の種目は詳細な分析を加え、陸上競技マガジンや研究誌において解説がなされる予定です。

さいごに、大会期間中は猛暑のなか、私たち科学委員会の活動にご理解・ご協力くださいました高体連、陸上競技協会をはじめ関係各所の皆さまに心よりお礼申し上げます。

スポーツくじ
toto FOR ALL SPORTS OF JAPAN
BIG

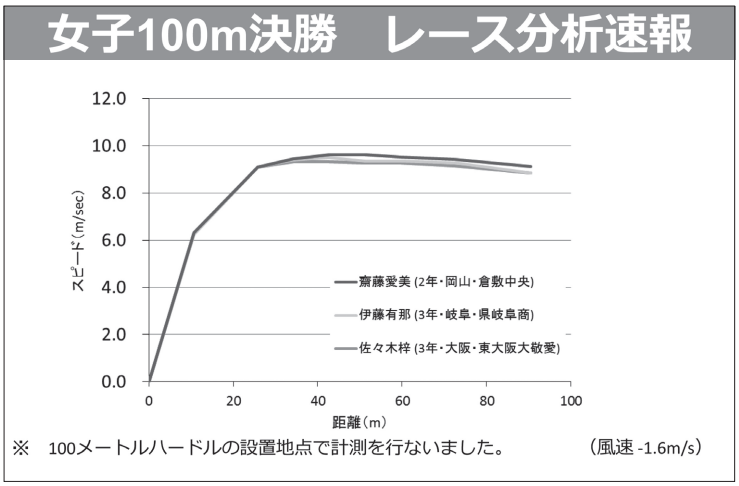

図２　走速度の変化曲線（女子100m決勝）

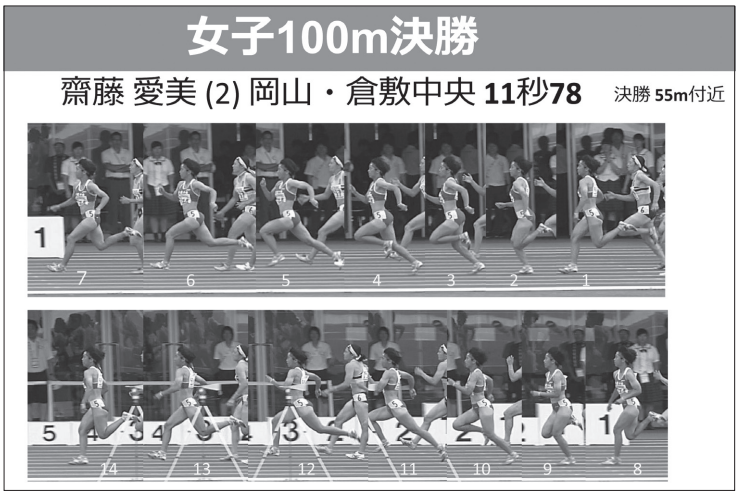

図３　連続写真の例（女子100m決勝）

大会観戦ガイド

第47回ジュニアオリンピック 陸上競技大会

中学生アスリートの夢の舞台、ジュニアオリンピック！　リレー日本一を決定する日本選手権リレーも同時開催！　ぜひ日産スタジアムに足を運んで下さい！

▼日時：10月28日（金）～10月30日（日）
▼場所：日産スタジアム
　　神奈川県横浜市港北区小机町3300
▼アクセス：JR横浜線・市営地下鉄「新横浜」駅から徒歩15分、JR横浜線「小机」駅から徒歩５分
▼種目
＜男子＞
区分Ａ：100m、200m、3000m、110mJH、走高跳、砲丸投
区分Ｂ：100m、1500m、110mH、走幅跳、砲丸投
区分Ｃ：100ｍ、1500ｍ、走幅跳
区分Ａ・Ｂ・Ｃ共通：円盤投、ジャベリックスロー、４×100mリレー
＜女子＞
区分Ａ：100m、200m、3000m、100mYH、走高跳、砲丸投
区分Ｂ：100m、1500m、100mH、走幅跳、砲丸投
区分Ｃ：100m、800m、走幅跳
区分Ａ・Ｂ・Ｃ共通：円盤投、ジャベリックスロー、４×100mリレー
＊年齢区分：2016年４月１日を基準として満年齢によって、下記のとおり３区分する
A. 14歳以上～15歳未満（2001（平成13）年４月２日生～2002（平成14）年４月１日生）
B. 13歳以上～14歳未満（2002（平成14）年４月２日生～2003（平成15）年４月１日生）
C. 12歳以上～13歳未満（2003（平成15）年４月２日生～2004（平成16）年４月１日生）
▼入場料：1,000円（１日）
※65歳以上・高校生以下無料
※当日券のみ
▼問合せ先：神奈川陸上競技協会
TEL：045-210-9660／FAX：045-210-9667
▼日本陸連WEB内大会ページ
ジュニアオリンピック
http://www.jaaf.or.jp/taikai/1382/

昨年度の大会より（女子4×100mRをU20日本新で優勝した東京高）

第100回日本陸上競技選手権 リレー競技大会

リレー日本一を決定する日本選手権リレー！
ジュニアオリンピックも同時開催！　ぜひ日産スタジアムに足を運んで下さい！

▼日時：10月28日（金）～10月30日（日）
▼場所：日産スタジアム
　　神奈川県横浜市港北区小机町3300
▼アクセス：JR横浜線・市営地下鉄「新横浜」駅から徒歩15分、JR横浜線「小机」駅から徒歩５分
▼種目
【日本選手権リレー】
＜男子　２種目＞
４×100mリレー、４×400mリレー
＜女子　２種目＞
４×100mリレー、４×400mリレー
▼入場料：1,000円（１日）
※65歳以上・高校生以下無料
※当日券のみ
▼問合せ先：神奈川陸上競技協会
TEL：045-210-9660／FAX：045-210-9667
▼日本陸連WEB内大会ページ
日本選手権リレー
http://www.jaaf.or.jp/taikai/1381/

第2回さいたま国際マラソン 兼第16回世界陸上競技選手権大会（2017／ロンドン）女子マラソン代表選手選考競技会

今年で第２回目となるさいたま国際マラソンは、ロンドン世界陸上競技選手権大会の女子代表選手選考を兼ねているほか、IAAFシルバーラベルの大会であり、国内外の有力選手が集います。

さいたまを舞台に繰り広げられる熱戦にご期待下さい。

▼日時：11月13日（日）
代表チャレンジャーの部　９時10分スタート
一般フルマラソンの部　　９時40分スタート

▼会場（スタート・フィニッシュ）：
さいたまスーパーアリーナ

▼アクセス：JR京浜東北線・宇都宮線・高崎線「さいたま新都心」駅下車、徒歩すぐ

▼コース：さいたま国際マラソンコース（さいたまスーパーアリーナ発着、IAAF･日本陸連公認コース）

▼テレビ放映予定：日本テレビ系全国ネット
11月13日（日）9：00～11：50（生中継）

▼問合せ先：さいたま国際マラソン大会事務局
048-832-2561（平日／10:00～18:00）

▼日本陸連WEB内大会ページ
http://www.jaaf.or.jp/taikai/1451/
大会公式サイト
http://saitama-international-marathon.jp/

昨年度の大会より（日本人トップの2位に入った吉田香織）

昨年度の大会より（A男子100ｍ決勝）

JAAF OKAYAMA 一般財団法人岡山陸上競技協会

〒700-0012　岡山市北区いずみ町2-1-11　岡山県陸上競技場内
TEL.086-214-3156　FAX.086-214-3156
http://www.tiki.ne.jp/~oka-rikkyou/

岡山の「熱い夏」が幕を閉じた。

岡山では、６月の中国高校選手権を皮切りに、７、８月の全国高校総体、そして８月の中国五県選手権と大きな大会を相次いで開催。中でも1977年以来39年ぶりとなった全国高校総体では倉敷中央高校の齋藤愛美が100m、200m、４×100mRと三冠を達成。また男子の倉敷高校勢も5000m、3000mSCの２種目を制覇。連日の岡山県勢の活躍は、地元陸上ファンのみならず大勢の地元住民を熱狂させ、大会を成功裏に終えることができた。

これもひとえに、中長期的な選手強化と運営面の整備が実を結んだものと感じている。

岡山では2018年に全国中学校大会が開催される。全国高校総体で培った強化ノウハウを基に再び地元勢が活躍することを期待したい。

全国高校総体陸上女子４×100ｍＲで初優勝を飾った倉敷中央高校。（山陽新聞社提供）

JAAF YAMAGUCHI 一般財団法人山口陸上競技協会

〒753-0815　山口市維新公園4-4　維新百年記念公園陸上競技場内
TEL.083-920-6125　FAX.083-920-6125
http://yaaf.jp/

山口陸上競技協会は、一般財団法人化となって今年で６年目に入り、今年2016年は第３期の２年目となります。組織の改編や専門委員会業務等の見直しを適宜行い、選手強化・競技運営力の向上をめざし山口県の陸上競技の発展のために尽力して参る所存です。

現在は2018年に開催決定の日本選手権の実行委員会発足に向けて準備中です。大会成功はもちろんのこと、全国規模の大会地元で開催することによる短期・中期・長期の相乗効果をねらい、ジュニア世代を中心とした選手強化面、競技役員の世代交代を含めた競技運営面でも準備をすすめています。さらに、例年10月中旬に開催している日本陸連後援の田島直人記念陸上競技大会をより発展させた大会に成長させることも急務として取り組んでいます。

明るいニュースとしては、先日ブラジルのリオで開催されたパラリンピックで下関市出身の道下美里（三井住友海上）が女子マラソンで銀メダルを獲得。オリンピックでは高島由香（資生堂）が10000ｍに出場し、力感溢れる走りを見せてくれ、県民に勇気と希望を与えてくれました。

また、ジュニア層を中心に全国大会での活躍のあった夏でした。

全国高校総体では田村紀樹（下関商業３年）が100ｍ3位、200ｍ8位入賞。大玉華鈴（西京２年）が七種競技で８位入賞。

全日本中学陸上では、宮瀬巧斗（上宇部中３年）が走幅跳で２位入賞。

全国小学生陸上では山口市陸上（小西・松田・石田・森野）400ｍリレー５位、蔵重みう（光スポ少）６年100ｍ６位、濵田美幸（ふくっ子）走幅跳６位と３種目で入賞しました。

（文責：普及育成委員長　藤田昌彦）

JAAF HIROSHIMA 一般財団法人広島陸上競技協会

〒730-0011　広島市中区基町4-1
県立総合体育館　（公財）広島県体育協会内
TEL.082-223-3256　FAX.082-222-6991
http://hiroshimatf.org/

今年の夏は、広島が熱かった。広島東洋カープの25年ぶりのリーグ優勝で広島は、真っ赤に染まり、街中が歓喜に沸き、感動の涙を流した。

もう一つ大きく広島が沸いたのは、リオデジャネイロ五輪での男子400mリレー。１走の山縣亮太選手は、広島県出身である。広島で生まれ、広島で育ったアスリートである。山縣選手の走り、それをつないでくれた３選手。この日本チームの走りに日本中が固唾を飲んで注目し、その姿に感動した。広島では、号外も配られ、この快挙を自分のことのように喜んだ。あれだけの舞台で、そして、プレッシャーの中で、力強い走りと華麗なるバトンパスを披露してくれた選手たち。

リオへ出発前の山縣選手激励会には、約200人の小・中・高の恩師や友達、関係者が集まった。「苦しい４年間だったが、近くで支え励ましてくださった皆さんがいたから、再び舞台に立てた」と本人が感謝の言葉を口にした。実際には、春先から悪化した腰痛との闘いだった。しかし、コーチ、トレーナー、マネージャーによる「チーム山縣」、地元の鍼灸師の支え、多くの惜しみない支援と応援により、100m準決勝で自己記録を更新する体に仕上がった。

陸上競技の広島出身者としては、織田幹雄さん以来となるメダルを手にした山縣選手。広島の誇りである。

（文責：企画広報委員長　藤原文代）

JAAF TOKUSHIMA 一般財団法人徳島陸上競技協会

〒772-0011　鳴門市撫養町大桑島字濘岩浜6-23
TEL.088-678-7914　FAX.088-678-7921
http://www.jaaftokushima.com/

本県の陸上競技場数は全国で最も少なく、鳴門市にあるポカリスエットスタジアム（第１種）、同第２陸上競技場（第３種）、徳島市営陸上競技場（第２種）、阿南高専陸上競技場（第４種）の４カ所です。そのうち、阿南高専陸上競技場は来年度に廃止の予定なので、鳴門市と徳島市の２カ所で競技会を実施することになります。

メインの競技場となるポカリスエットスタジアムは1993年の国民体育大会に向けて前年に大改修を行いました。トラック９レーン、写真判定装置・大型スクリーンの常設など、地方の競技場としては恵まれたものでした。昨年度はバックスタンド（屋根付）の増設やフィールド芝の張り替え、本年度はメインスタンドの屋根や部屋の改修などが続きました。そのため、競技会運営には種々の困難が生じましたが、競技役員の努力や競技者等の協力で、なんとかクリアできました。

ただし、大改修から24年が経ち、ウレタン材の劣化も目立つようになり、本年度の継続検定において、基礎からの全面改修、第２競技場も全面オーバーレイの改修を検討するよう指摘がありました。

加えて、徳島市営陸上競技場も劣化が著しく、来年度からスタンドも含めた大規模改修に入り、県内すべての競技場が５年以内に改修という状況になりました。日頃の練習、競技会の実施などに対していろいろな問題が出てくるかと思いますが、協会役員、審判員、競技者の努力と工夫によって乗り越えていきたいと思います。

（文責：理事長　佐竹昌之）

陸協NEWS

JAAF KAGAWA 一般財団法人香川陸上競技協会

〒763-0053　丸亀市金倉町830番地　香川県立丸亀競技場内
TEL.0877-21-5710　FAX.0877-35-9061
http://gold.jaic.org/jaic/member/kagawa/index.htm

香川県出身の荻田大樹選手（ミズノ）がリオオリンピックに男子棒高跳で出場しました。本県から陸上競技でオリンピックに出場したのは、16年前のシドニーオリンピックに出場した横山学選手（現香川高専教員）以来のことです。荻田選手は、オリンピックでは残念ながら本来の力を発揮できず予選敗退となりましたが、本県の選手がオリンピックの舞台で活躍する姿は、陸上関係者のみならず、香川県全体に興奮と感動をもたらしてくれました。

オリンピックに負けじと、７・８月のインターハイ、高校選抜大会、全日中、全国小学生交流大会では本県の選手が活躍を見せてくれました。インターハイでは、男子棒高跳で吉田賢明選手（観音寺中央３年）が２位、重藤慶多選手（高松一３年）が４位、男子走高跳では板東琉太選手（高松工芸２年）が４位に入賞し、高校選抜大会では安宅伽織選手（高松工芸３年）が女子棒高跳で３位に入賞しました。全日中では男子棒高跳で中村徳寿選手（木太３年）が６位、４×100mRで大野原中が４位に入賞しました。また、全国小学生交流大会では、４×100mRで大野原小が７位に入賞しました。

この文章が掲載される頃には国体も終わっていると思いますが、すでに活躍をみせている選手はもちろん、インターハイ、全日中などで力を発揮しきれなかった選手達が良い結果を残せていることを願います。

（文責：事務局長　山尾英二）

JAAF KOCHI （NPO）高知陸上競技協会

〒781-0311　高知市春野町芳原2485　春野総合運動公園内
TEL.088-841-9940　FAX.088-841-9940
http://npo-kochi.sports.coocan.jp/

第3種公認宿毛市陸上競技場

高知県内には、公認大会開催可能な第３種以上の陸上競技場が３ケ所あります。高知市内に２ケ所と西部の宿毛市に１ケ所です。高知県は東西に170キロと長いのですが、中心にある高知市以東には、全天候型トラックを備えた競技場はありません。競技場建設には多額の費用が発生しますので、なかなか新競技場の建設は難しいのですが、大規模な施設でなくとも400mトラックとインフィールドに天然芝を備えた競技場がひとつあれば、陸上競技だけでなくサッカーや多目的なスポーツ利用・イベントにも利用可能です。

現在、サッカー場や陸上競技場を建設してほしいという要望はありますが、実現へ向けてはいろいろと課題があるようです。自宅や学校近くに、気軽にランニングできる施設があれば、生涯スポーツの推進や競技力の向上にも大きく寄与すると思われます。競技団体としては、未来へ向けてそのような声をつなげていきたいと考えています。

（文責：総務委員長　島津卓）

JAAF EHIME 一般財団法人愛媛陸上競技協会

〒790-0004　松山市大街道3-6-2　岡崎第五ビル501
TEL.089-968-2229　FAX.089-968-2231
http://www.ehime-rikujyo.jp/

この夏は愛媛県にとって、いろいろニュースがありました。

まず、うれしいニュースとして、長野県松本市で開催されました全日本中学校陸上競技選手権で何10年振りかの全国チャンピオンが女子200mで生まれました。戦前の勝って当然の下馬評の中のプレッシャーに打ち勝っての優勝は本当に素晴らしいものでした。他にも女子800m、女子1500m、女子100mに入賞者が生まれましたが、全て女子種目であることに『媛の国』と呼ばれるゆえんかと思いました。そして、来年のえひめ国体に向けて男子の奮起を期待するところです。

次に、先日、台風16号接近の中、日本陸連からお二人に来県していただき、えひめ国体のキックオフミーティングを実施しました。陸上競技場及び練習会場、監督会議場、資格審査会上等を視察していただき、ご意見をいただきました。これでえひめ国体もあと１年という実感の中、準備もより核心に迫ってきました。ただ、競技場が陸上競技を実施するには何かと遣い勝手が悪い作りであることは否めず、今も県への折衝中ですが、なかなか改善は厳しい状況です。

最後に、来年２月に開催される愛媛マラソンの申込が先日終了しました。この近年、高評価をいただいている中で、申込状況が気になりましたが、過去最高人数であったという報告がありました。過去最高の申込者数であることは過去最高の落選者を生むということになるということを肝に銘じて、落選された方々が次回こそは走りたいという思いを強くしていただけるような運営を目指して、これから準備に入っていこうと思っています。

（文責：専務理事　中山桂）

JAAF FUKUOKA 一般財団法人福岡陸上競技協会

〒812-0011　福岡市博多区博多駅前2-1-1　福岡朝日ビルB2F
TEL.092-474-0002　FAX.092-474-0002
http://www.fukuriku.com/

今年の福岡国際マラソン選手権大会は、70回記念大会として、また来年、ロンドンで開催される第16回世界陸上競技選手権大会の代表選手選考会を兼ねて12月４日に開催されます。すでに、８月10日に事務局を開設（写真）、参加申込の受付も９月26日に締め切られました。昨年より参加資格が厳しくなりました。Ａグループは従来通り２時間27分以内ですが、Ｂグループが２時間35分以内になります。リオ五輪から４年後の東京五輪を目指すホープの出現に期待したいです。

他にも、この期間は、全日本実業団女子駅伝予選会（プリンセス駅伝）、今年から北九州市若松区にコースを変更する九州実業団駅伝など注目度の高い競技会の運営が続くので、福岡陸協の総力を結集して各大会を円滑に運営したいと考えています。

なお、福岡国際マラソン選手権大会の公式ホームページは次の通りです。
第70回福岡国際マラソン選手権大会
http://www.fukuoka-marathon.com/

（文責：総務部長　橋本忠志）

事務局からのお知らせ

◇◆ロンドン世界選手権に向けた戦いが始まっています！◆◇

来夏、イギリス・ロンドンで開催される第16回世界陸上競技選手権のマラソン・競歩のこれからの選考競技会は下記の通りです。是非、競技場・沿道で代表をかけた熱い戦いに応援をお願い致します。

〈男子マラソン〉

・第70回福岡国際マラソン選手権大会	2016年12月4日（日）開催
・第66回別府大分毎日マラソン大会	2017年2月5日（日）開催
・東京マラソン2017	2017年2月26日（日）開催
・第72回びわ湖毎日マラソン大会	2017年3月5日（日）開催

〈女子マラソン〉

・第2回さいたま国際マラソン大会	2016年11月13日（日）開催
・第36回大阪国際女子マラソン大会	2017年1月29日（日）開催
・名古屋ウィメンズマラソン2017	2017年3月12日（日）開催

〈男子競歩〉

・第55回全日本50km競歩高畠大会	2016年10月23日（日）開催
・第100回日本陸上競技選手権大会・20km競歩	2017年2月19日（日）開催
・第41回全日本競歩能美大会	2017年3月19日（日）開催
・第101回日本陸上競技選手権大会・50km競歩	2017年4月16日（日）開催

〈女子競歩〉

・第100回日本陸上競技選手権大会・20km競歩	2017年2月19日（日）開催
・第41回全日本競歩能美大会	2017年3月19日（日）開催

◇◆日本選手権リレー・ジュニアオリンピックの動画を公開します！◆◇

10月28 日（金）から10月30日（日）まで、神奈川・日産スタジアムで開催する第100回日本陸上競技選手権リレー競技大会、第47回ジュニアオリンピック陸上競技大会の動画を昨年に引き続き公開致します。激戦の模様をもう一度、お楽しみ下さい。

アクセスは　http://www.jaaf.or.jp/jro/47/　まで

※アクセス先は昨年と異なりますのでご注意下さい。

◎6月24日（金）～ 26日（日）に愛知・パロマ瑞穂スタジアムで開催しました第100回日本陸上競技選手権大会の動画（アクセス：http://www.jaaf.or.jp/jch/100/）は好評公開中です！

昨年のジュニアオリンピックの様子

陸連時報編集委員

◇編集委員
横川　　浩（陸連会長）
友永　義治（陸連副会長）
八木　雅夫（陸連副会長）
尾縣　　貢（陸連専務理事）
伊東　浩司（陸連強化委員長）
風間　　明（陸連事務局長）
牧野　　豊（陸上競技マガジン編集長）

◇時報編集室責任者
大嶋　康弘
◇時報編集担当
繁田　　進
石塚　　浩
木越　清信
宮田　　宏
高橋　祐哉
小川ちあき

陸連時報編集室

〒163-0717
東京都新宿区西新宿2-7-1
小田急第一生命ビル17階
公益財団法人日本陸上競技連盟 内
TEL 03-5321-6580
FAX 03-5321-6591
WEBサイト http://www.jaaf.or.jp/
公式動画サイト http://japanathletics.tv/